

52 定形性

学校文法では基本的に使われないが、しかし重要な用語の一つとして**定形 (finite form)** (**動詞**) あるいは**定動詞**がある。概略、(1) のように定義できるが、具体例として(2)を見てみよう。なお、**屈折 (inflection)** とはより簡単な用語を用いれば語尾変化すなわち動詞の**活用 (conjugation)**のことである。

- (1) 動詞が主語の人称 (person), 数 (number), 動詞の法 (mood), 時制 (tense) により屈折している形態
- (2) a. He *walks*. b. If I *were* a bird, I would *fly* to you.
- (2a) は中高で3単現と呼ばれているものであるが、これを(1)の立場から正確に記すと、*walks*は「3人称・単数・直説法・現在時制」の定形、(2b)の仮定法も正確には「1人称・単数・仮定法・過去時制」の定形ということになる。

ドイツ語やフランス語などの他のヨーロッパ系言語を学ぶと定形や定動詞という言葉をきちんと学ぶが、学校英文法ではこの定形という重要な用語が使われない。その理由は現代英語では屈折が摩耗し、be動詞を除いて明示的な定形の語尾が残っていないことに起因するのだと思われる。すなわち、現代英語の本動詞は形態論的に(i) 3単現の*walks*、(ii) 3単現以外の現在形*walk*、(iii) 過去形*walked*の3種類しか存在しないのである。

さて、ここで定形の意味が理解できると、中学からお馴染みの不定詞 (infinitive) や準動詞 (verbal) の別名である**非定形 (non-finite form)**の意味が正しく理解できる。一見すると、不定詞はいつも原形なのであるから、逆に不定ではない気がするかもしれない。しかし、一言で言えば、(3)に示すように不定詞や非定形は定形の反意語なのである。例として(4)、(5)を見てみよう。

- (3) a. 非定形：人称、数、時制、法によって動詞の形態が定まらない（形）
b. 非定形の下位区分：不定詞、動名詞、分詞
- (4) a. It is difficult for me to *answer* the question.
b. *It is difficult for him to *answers* the question.
- (5) a. She seems to *be* an actress.
b. *She seems to *was* an actress when she was young.
- (4b) が示すように主語が3人称単数となっても不定詞は**to answers*とはならないし、(5b) が示すように不定詞節の表す時が仮に過去となっても不定詞は**to was*とはならない。すなわち、不定詞節においては動詞の形態は人称や時制などによって変化しない (=定まらない、定形とはならない)。これをもってして、不定詞と

いう用語が用いられるということである。(同じ「不定」であっても、不定冠詞や不定代名詞の「不特定」という意味合いとは違うという点が重要である。) そして、動名詞や分詞も(3a)の定義に従うことから非定形とみなされるが、学校文法では継続的・共通的な指導がなされる準動詞は言語学的には非定形という共通の括りで括られる構文だということになる。

最後に、**定形性 (finiteness)** の診断テストとして何を考えればいいかという話をして本稿を閉じたい。様々な考え方がある存在すると思われるが、わかりやすい診断テストは(6)だと思われる。例として、(7)–(10)を見てみよう。

- (6) 節の主語として主格が現れる節は定形節であり、主格以外の格 (=属格、対格、斜格) が現れる節は非定形節である(野村(2015: 320)参照)。
- (7) a. It is difficult for {*he*/*his/him*} to answer the question.
b. I believed [{*he*/*his/him*} to be happy]. (不定詞節)
- (8) Would you mind {*I/my/me*} opening the window? (動名詞節)
- (9) a. *She* being the next of kin, she inherited everything.
b. *He* waiting for her in the hall below, she had to find another way of leaving the hotel. (分詞節 (=独立分詞構文)) (Declerck 1991: 462)

- (10) Don't {*you*/*your*} sit down. (命令文)

- (11) I demanded [that {*he*/*his/him*} leave at once]. (仮定法現在節)

まず、不定詞節についてであるが、(7a)に示す通り、不定詞節を導く前置詞的な補文標識 *for* が現れる場合、斜格の *him* が現れる(ここでの斜格は前置詞の目的格と考えて差し支えない)。また、(7b)の構文は生成文法では「例外的格付与(ECM)構文」と呼ばれるが、英語史では伝統的に「不定詞付き対格」(accusative with infinitive)と呼ばれてきたように対格(学校文法の目的格)であり、不定詞節は非定形節だと結論できる。(8)の文法的な動名詞はそれぞれ属格(=所有格)動名詞(*my*)、対格(=目的格)動名詞(*me*)と呼ばれるが、よって動名詞節も非定形節である。(ちなみに動名詞の格付与をどう説明するかは容易ではない)。分詞は我々英語学者の直観では非定形節であるが、(9)の独立分詞構文で主格が現れるとすれば、定形節だと考えざるを得ない。命令文はしばしば「原形の命令的用法」だと考える向きもあるが(=非定形)、(10)の主格は命令文が定形節であることを示している。同様に、仮定法現在節もその形態から「時制がない」(=非定形)と考える主張もあるが、(11)の主格は仮定法現在節が定形節であることの証左である(Nomura (2006: Chapter 9) 参照)。

(野村 忠央)